

# 夢のつばさプロジェクト

## 2013年冬キャンプ 学生報告書

夢のつばさプロジェクトの宿泊型キャンプは、東日本大震災直後の夏から開始され、今回の冬キャンプで7回目となります。おなじみの顔ぶれに新しい子どもたちも加わり、25名というこれまでに最も多い人数の子どもたちを迎えて、にぎやかな4日間となりました。

【実施期間】2013年12月21日～24日（3泊4日）

【開催地】(株)ブリヂストン保養所奥多摩園（青梅市）

【参加内訳】

子ども：計25名（小学生18名、中学生6名、高校生1名）

学生スタッフ：40名（途中入れ替わりを含む）、社会人スタッフ：15名（同左）

### ■キャンプの柱

---

今回のキャンプでは、次の三つをキャンプの大きな柱として子どもたちに

- |         |
|---------|
| ①挑戦     |
| ②自立     |
| ③広く深い関係 |

を目指してもらいたいと考えました。

この柱に基づき、学生間で合言葉を決め、目標を3つ決めました。

#### ①「挑戦」

：「やってみよう」を合言葉とし、尻込みしているこどもには学生からこの一声をかけ、すべてやってあげるのではなく一歩引いて見守る。

#### ②「自立」

：学生、大人に対してもしっかり挨拶ができるよう、学生が率先して挨拶をする。

#### ③「広く深い関係」

：特定のこどもとだけ仲良くなるのではなく、学生がすべてのこどもたちに目を配り、声をかける。

### ■4日間の流れ

---

この冬のキャンプは、子どもたちが学生や他の子と交流する時間を多く取りたいと考え、外部を訪問することなく、奥多摩園内で、学生企画を多数準備しました。

【21日】	【23日】
開会式 アイスブレイク企画	勉強会 料理企画
【22日】	人生ゲーム企画 クリスマス会 音楽会
勉強会 お祭り企画	【24日】
	閉会式

<詳細>

◎開会式

久々の再会ではしゃいでいる子どもたちも、初参加で緊張気味の子どもたちもいる中、今回の合言葉である「やってみよう」をみんなで確認しました。

◎アイスブレイク企画

じゃんけん列車や絵しりとりなど、室内でいくつかのミニゲームを行い、時には大人スタッフも一緒になって楽しみました。開会式では緊張の表情を見せていたこどもたちも、ゲームを楽しむ中で少しずつ打ち解けて笑顔を見せていました。

◎お祭り企画

セミナー室（大）で、ゆめつば縁日を作り上げました。いくつかのチームに分かれて、使える材料を見ながら、メンバー内で何の店を出すか相談し、それぞれのチームで個性豊かなお店を作り上げました。昼食時の爪楊枝を、お店に並べるものの材料に使ったり、得意の絵を描いて商品にしたり、段ボールを使って大きな作品を作り上げたりと、それぞれの子どもの発想や個性、得意が引き出され、とても素敵なお店ばかりが並びました。こどもたちは生き生きと顔を輝かせて夢中で取り組んでいました。

年少の小学生と年長の高校生が協力して楽しむ様子も見ることが出来ました。



### ◎料理企画

青梅市の市民センターに移動して、シチューづくり、サラダ作りを行いました。最初に班ごとにじゃんけんをしてシチューに入れるプラスアルファの食材（コーンやチーズ、マッシュルームなど）を選び、その食材を入れて、班ごとに個性のあるシチューを作りました。野菜の嫌いな子も少なくないのですが、自分で作ったシチューはやはり特別とみえ、「んー、くせになる味〜」など言いながら、おいしそうに食べていました。



### ◎巨大人生ゲーム

子どもたちが自分で内容を考え、画用紙に書き、それを連結した長机の上に並べて、特大サイズの人生ゲームを作りました。完成したあとはチーム対抗で、実際にサイコロを転がして人生ゲームで遊びました。子どもたちの想像力から生まれた様々なマスが所狭しと並び、世界で一つだけの人生ゲームとなりました。大きいサイコロを回して対戦するのも楽しかったようです。



## ◎クリスマス会

トナカイの耳やサンタ帽をそれぞれ身に着けて、セミナー室をみんなで装飾し、クリスマス気分を盛り上げました。桐朋学園の音大生がボランティア参加でフルートとバイオリンを演奏して下さったり、社会人スタッフがサンタさん役を演じて子どもたちにクリスマスプレゼントを配ったりしました。

毎年プレゼントを届けてくださる支援者の方々がいらっしゃいます。学生たちも色々と案を練って楽しみました。

最後は、恒例の「つばさをください」を全員で合唱して締めくくりました。



## ◎閉会式

恒例どおり、3日間の写真をスライドショーにして思い出を振り返り、子どもたちひとりひとりにメッセージカードを渡しました。それに加え、「約束カード」を子どもたちにも書いてもらいました。これは、次の夏キャンプまでにそれぞれが頑張ることや達成したいことを学生と約束し、カードに書くというものです。とても力の強いお転婆な女の子が「もっと強くなる！（力）」と書いて学生を笑わせたり、来年の春に高校生になる子が、「志望校合格！」と書いたり、それぞれの個性・想いの詰まったものとなりました。何より、全員が「次のキャンプまでに」という前提を受け入れて、次もその次も、キャンプに来て再会する、ということを楽しみにしていることが伝わってきたことがとても嬉しく感じられました。

## ■全体を通して ～成果と課題～

---

1. 今回のキャンプでは、初めに挙げたとおり、「挑戦」「自立」「広く深い関係」を柱として実施しました。「やってみよう」という合言葉は、多くの子どもたちも積極的に使っており、中には、子どもたちに「やってみよう」と言い負かされて、夕食で出された大の苦手の刺身を完食させられた学生もいました（笑）。中にはなかなか積極的になれない子どもたちもいましたが、そうした子どもたちに対して、これまで学生がすぐに手を差し伸べていたところを、見守り挑戦させるという接し方を心がけることができました。これは今回に限らずこれからも、続けていきたいと思えます。

また、あいさつを徹底することや自分で食べるものを作る料理企画で「自立」を、また、学生が同室の子どものみならず、すべての子どもたちと関わることを大切にすることで「広く深い関係」を意識しましたが、これらも同様に、ずっと続けていくテーマとして、次回以降にもつないでいきたいと思えます。

2. 今回も、「夏が待ちきれない!」「夢のつばさキャンプは楽しいから、次も絶対来るよ」など、すでに次のキャンプを待ち望む言葉をたくさん聞くことができました。中には、帰り際に学生にしがみついてくる子や、「帰りたくない」と泣き出しそうになる子もいました。夢のつばさが、子どもたちの心のよりどころ、居場所になってきていることを改めて感じることができました。

これにちなんでひとつ、エピソードを紹介したいと思います。

今回の冬キャンプが初参加だったある姉妹は、キャンプの初日は警戒心が解けず、学生のことをにらむような強い目つきで見えていました。しかし日を重ねるごとに、2人の笑顔はだんだんと増えていき、表情もとても柔らかくなりました。そして最終日の帰り際には、初日とは別の意味を含んだ強い瞳で、「ぜったい次も来るからね!!!」と言ってくれたのです。たった4日間とはいえ、本気で向き合うと確実に子どもたちは変わると実感しています。一緒にいられるのはわずかな時間ですが、夢のつばさのキャンプが、参加してくれる震災遺児孤児の子どもたちに与えられるものは必ずある、と思える瞬間でした。

3. 夢のつばさプロジェクトの目指しているものは、子どもたちが成人するまで見守る中で、「心のよりどころを作ること」と「夢を応援すること」です。これからは、二番目の「夢の応援」に向けて、職業体験などのコンテンツをさらに増やしていきたいと考えています。小学生と中高生ではどうしても求めているものなども変わってくるので、夢の応援にむけた企画では、小学生と中高生それぞれに合ったものを提供していくことも考えています。

このようなキャンプを行うことができますのも、ご支援くださっているみなさまのおかげです。この場をお借りして、改めて厚くお礼申し上げます。今回のキャンプで見つかった課題を必ず次につなげ、子どもたちの成長を長い目で見守って行けるよう、これからも一同頑張っていきます。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。